

第 39 回学会大会

シンポジウム

生態系資源と文化的資源をつなぐライフデザイン

— 架け橋としてのレジャー・レクリエーション —

土屋 薫 (江戸川大学)

【 提案趣旨 】

クオリティ・オブ・ライフの原点には「毎日ここで暮らすことが楽しいからこそ、ここに住み続けているのだ」という想いがあるように思う。この「暮らし」の現場のひとつである「地域」には、フィールドとしての自然環境をはじめとして、歴史的・文化的・社会的文脈など、様々な要素が介在する。ここでは、それらを結ぶものとして「レジャー・レクリエーション」に着目してみたい。

このシンポジウムは三部構成となっており、セッションAでは「親水レクリエーション&スポーツ」、セッションBでは「世界の水辺空間&都市開発」をテーマにしている。また総括セッションでは、セッションAとセッションBを踏まえた上で、地域資源を生かした「豊かさの実現」にむけてパネリスト達と考えていく予定である。それは、交流人口も交えたまちづくりという視座を与えてくれる。またこのような複眼的な視点こそ、本学会ならではの提唱し得ることのひとつと言って良いであろう。

【 セッションA : 親水レクリエーション&スポーツ 】

メインスピーカーとして、東京海洋大教授で船の科学館理事でもある庄司邦昭氏を迎え、「船を通した川とのつきあいかた」というテーマで話題を提供していただく。庄司氏は風景フォーラムをベースにして江戸川の水辺環境学習も行われていらっしゃるが、ここではさらにゲストスピーカーをお呼びして、レジャー活動という実践の場からテーマに迫る。千葉県の流山市から柏市へと都市部を流れる大堀川においてカヌー実習を実施している郡司俊雄氏と湘南の海でライフセービングと冒険スクールを展開されている遠藤大哉氏をお招きした。

また、3氏の話をつなぐコーディネーターには、日刊スポーツ編集委員を経て、現在、江戸川大学でアウトドアにおける市民スポーツの最新領域を研究している後藤新弥氏をお願いした。

【 セッションB : 世界の水辺空間&都市開発 】

美術家であり都市景観研究家でもある樋口正一郎氏をメインスピーカーに迎え、「水辺空間の現在 — ソウル・ロンドン・バーミンガム —」というテーマで、世界 250 都市で撮られた写真をふんだんに使って事例紹介をしていただく。またゲストスピーカーには恵良好敏氏と新保國弘氏を迎え、流山市周辺を事例として、「おおたかの森」や「利根運河」といった地域の魅力となる資源をいかに残すか、いかに育むか、といった観点から話を伺う。ここでは主に空間利用に焦点を当てる予定である。

こちらのコーディネーターには、現在、江戸川大学社会学部ライフデザイン学科教授と江戸川大学総合福祉専門学校校長を兼務し、NPO 法人荒川流域ネットワーク代表理事でもある恵小百合氏をお招きした。石垣島をフィールドとして川の源流からサンゴ礁の海までをトータルに捉えた「流域経営」の視点による交通整理を期待したい。

【 総括セッション : ひとがリピーターを育み、リピーターがひとを育てる

～着地型観光に学ぶ地域の誇り～ 】

電通 OB で流山市在住の行政コミュニケーションアドバイザーである梅谷秀治氏をコーディネーターに迎え、CS (顧客満足) の視点から見た地域づくりについてディスカッションを進めていく。

キーワードとして直接挙げられているのは「リピーター」だが、その背景には地域の価値に根ざした誇りと、それを媒介とした交流というヒントがある。ケーススタディとして千葉県流山市を取り上げて検討していく予定だが、それぞれのセッションで浮かび上がってくるであろう「川遊び」(セッションA)や「里山・里川」(セッションB)といった概念を組み上げて、流山市が標榜する「都心に一番近い森の街」を実現するには、何が求められるのであろうか。

セッションAからはコーディネーターの後藤新弥氏とメインスピーカーの庄司邦昭氏、セッションBからはコーディネーターの恵小百合氏とメインスピーカーの樋口正一郎氏、さらにゴールデン・ウィークに催されたオープン・ガーデンで、のべ6800人あまりの訪問客を受け入れた流山市のガーデニングクラブ「花恋人(かれんと)」の会長小高静子氏と井崎義治流山市長を招いて、話を進める予定である。

また、これらのセッションを結ぶ横糸として、第1日目(11月27日金曜日)の地域研究「旧葛飾郡エリアのレジャー・レクリエーション資源」を企画した次第である。江戸川大学のある千葉県流山市の周辺は「東葛」地域と呼ばれ、江戸川のほとりに位置し、現在でも筑波山と富士山だけでなく赤城・榛名・浅間といった山々が望める地である。江戸時代には徳川幕府直轄の放牧地だったこの「かつしか」の郡は律令制の時代に定められ、万葉集にも詠まれている。

このような地域の特徴を背景に、都立水元公園(旧南葛飾郡:現東京都葛飾区)から、流山おおたかの森(旧東葛飾郡:現千葉県流山市)、利根運河(旧東葛飾郡:現千葉県流山市・野田市)、首都圏外郭放水路(旧中葛飾郡:現埼玉県春日部市)をまわり、特に川に着目してレジャーと自然の豊かな関係を考える。

ホームページでも確認できるように(http://www.ktr.mlit.go.jp/edogawa/project/g-cans/frame_index.html)首都圏外郭放水路は「地下大神殿」の様相を呈しているが、今回取り上げたのは単に規模の問題からだけではない。高度経済成長期の中で日常生活における川や水とのつきあいを「あきらめた」ときから、「持続可能な」ライフスタイルをあらためてテーマに掲げなければならないような社会へ踏み出していたと言えるのではないだろうか。

そうしてみると、今や「裏口」と化した川の復権を企図することを「川」の名のつく大学の責務と感じるのは行き過ぎだろうか。各セッションの際にも、このような視点を思い出していただけると幸いである。